荒木 廸夫（あらき みちお）

学位の種類　経済学博士

学位記番号　経第33号

学位授与年月日　昭和63年10月13日

学位授与の要件　学位規則第5条第2項該当

学位論文題目　商品と貨幣

論文審査委員　（主査）
教授 柴田信也　教授 金田重喜
助教授 大村泉

論文内容の要旨

本論文は、「商品と貨幣」の関係について、K. Marxの一連の著作等の検討を通じて、その理論的確定を試みんとしたものである。そのさい、検討対象としたのは、『草稿（1857～58）』、『経済学批判』、『草稿（1861～63）』、『資本論』（初版）、（2版）、（4版以降）、（フランス諸版（ロア版））などである。その結果、明示的になったと筆者の考える基本的な論点は以下のとおりである。すなわち、（1）商品よりの貨幣の理論的生成は、「価値実体」および「価値形態」（さらに、この両者の総括としての「商品の物神性」）の一体的把握と「交換過程」によるディメンジョンを異にする最終的結着との統一のうえに成立するものであること、（2）貨幣の機能は、一定の理論的順序に従った内容であり、したがって、関係的階層をなすべきこと、の二点である。

著書『「経済学批判」と「資本論」』では、（1）および（2）の論点を『経済学批判』と『資本論』（初版）との直接的対照の下に検討を加えたものである。ただし、「商品の物神性」と「価値尺度」については、『資本論』（2版）以降との照合・吟味をも併せ試みた。また、この姉妹編をなす別著『「資本論」と価値論」』では、特に「価値形態」について、『資本論』の（初版）の本文と「付録」、（2版）、（4版）および（ロア版）については逐語的に検討し、前著の欠を補わんとしたものである。さらに、前著における「商品の物神性」の（初版）と（2版）以降の異同や差異などの洗いだしも試みておいた。

ところで、商品は、なによりもまず、二要因としての「使用価値」と「価値」の「内面的対立」

である。商品は、一面で、人間「欲望」の「外的対象」であり、「他人のための」「有用な」財貨であって、しかも「具体的労働」の人工的成果である。また、他面で、人間欲望と直接には無関係な「対象（モノ）」であり、他人の使用価値を「ワガモノ化」しうべき力であり、かつ、「労働」の「抽象的」「外化」である。これら商品の一般的な「内的対立」が、ひとたび「外的対立」におよぶや、「使用価値」と「価値」は二元化し、一面で「自然的対象」となり、他面で、「社会的対象」と化す。交換力を直接的にはもちえぬ「使用価値」商品と交換力をえ、したがって、その量的計測力をも併せもつ「交換価値」商品との「外的対立」となるのである。いまや、全商品は全商品と直接的に対等な取引に応ずることはできない。

ところで、「価値」は、その「現象形態」としては、「使用価値」としての自然形態の「否定」のうえに成立する。そして、「単純な」「第一形態」、「全体的な」「第二形態」、「一般的な」「第三形態」の順序で「本質的な変化」を展開する。「価値形態」とは、あくまで、「価値実体」が「等価物」商品の「身体」へ転倒的反射をするプロセスそのものを指すのである。したがって、「等価物」主体の交換表示や「相対的価値形態」にたつ商品所有者の「欲望」表現などは、検討対象外である。かくてこそ、商品世界における任意の（1：1）商品の組【n（n－1）】を総ぞろいさせることができるのであり、対等取引の存否を不問に付すかぎり、直接的交換と同義になる。しかも、「等価物」商品は、その身体から「使用価値」としての「有用性」を排除し、「交換力」としての「有用性」を装着し、もって、「任意の」一商品による「単独」転置から「全ての」商品（n－1）による「共同一致的」転置への進行を計るのである。「第一形態」より「第二形態」への転化は、「任意」の一組と同質な組の（n－1）組の「集合」化をもってし、「第二形態」より「第三形態」への転化は、「第二形態」の（n－1）組の構成要素、「第一形態」の「単位組」の「反対組」による「再編成」をもってすればよし、ということになる。「本質的変化」を欠く「貨幣形態」は「一般的等価物」の「実名」化による「独占」を示すが、しかし、このことは、「交換過程」における課題の先取的提起にすぎず、「価値形態」における本題からするならば、蛇足的「形態」にすぎない。「価値表現」の到達点、「一般的等価物」と「相対的価値形態」に前提される「使用価値」との対立こそ、「商品の二要因の対立」の「外化」をなすのである。以下、「価値形態」の「組合せ表」を参考にまでに掲げておこう。

【価値形態表】

w_1	－	w_2	w_2	－	w_1	w_3	－	w_1	・・	w_g	－	w_1	w_{m+1}	－	w_1	・・・・・	w_n	－	w_1
w_1	－	w_3	w_2	－	w_3	w_3	－	w_2	・・	w_g	－	w_2	w_{m+1}	－	w_2	・・・・・	w_n	－	w_2
・		・	・		・	・		・	・・	・		・	・		・	・・・・・	・		・
w_1	－	w_g	w_2	－	w_g	w_3	－	w_g	・・	w_g	－	w_{m-1}	・		・	・・・・・	w_n	－	w_{m-1}
・		・	・		・	・		・	・・	・		・	w_{m+1}	－	w_g	・・・・・	w_{m+p}	－	w_g
・		・	・		・	・		・	・・	・		・	・		・	・・・・・	・		・
w_1	－	w_n	w_2	－	w_n	w_3	－	w_n	・・	w_g	－	w_n	w_{m+1}	－	w_n	・・・・・	w_n	－	w_{n-1}

注（商品種はn番目まで。w_gはm番目（n＞m）、m＋p＝nとする。）

次に、「交換過程」における課題は、「使用価値」と「価値」の「直接的統一」であり、その「矛盾」である。または、その「一全体」としての「現実的」関係である。かかる理論的現場では、「商品所有者」にとって、その所有商品が、「使用価値」として、「他人のため」のものであることを確証せんがためには、その「他人」の所持商品獲得力としての「価値」としての実現を前提せずばならず、「価値」として「他人」の「使用価値」を得んがためには「使用価値」としての「自分」の「実証」がその必然の条件となる。進んで自己の欲求する「他人」の商品の品数や数量が制限される「個人的過程」にたいし、「自己」の商品に期待する「価値」の効力を無制限とする「社会的過程」を配するならば、またも、商品は「使用価値」と「価値」との改めてのディレンマに陥るであろう。さらに、「価値」の「形態」の展開的結晶たる「一般的等価物」そのものも一斉的競合下での総すくみ状態にいたるや、改めて、商品の二元的外化を封ずるにいたる。かくて、この矛盾の解決のいとぐちは、「一般的等価物」の商品世界よりの独占的選抜の開発による商品世界の二元的再構成にこそ見出される。「交換価値」としての「一般的等価物」は、「量」的計測器としては、「できうるかぎり大きく、できうるかぎり小さい値をとり、できうるかぎりきめこまかく計る」ことを理想型とし、これに最も近似的なものを選べばよし、ということになる。すなわち、「最大値、最小値をとりえ、最高数の目盛を示しうる」商品こそ、この独占的一般的等価物＝貨幣商品となり、反転して他の全商品を「使用価値」としても客観的に固定するにいたるのである。

かかる「一般的等価物」の「独点」商品としての「貨幣」は、その「貨幣」としての「機能」を介し、順次、「使用価値」と区別される価値存在を獲得し、最後に、その「概念」に一致する「定在様式」に落着する。すなわち、貨幣商品は、「観念的」ないし「心に画かれた」形態から「実在的」な形態へ、「商品流通」の「内」から「外」へ、「手段」から「目的」へ、「一時的」形態から「不動化された」「休止的」「固定的」形態へ、「代理者を含む」「定在」から「地金形態」一本やりの「定在」へ－これである。

第一の「価値尺度」は、「流通」「交換」の「理論的準備」として価値量の測定を行う。ただし、その測定は、貨幣の実動を要せず「観念的」ないし外的なものである。いまや、「一般的等価物」としての貨幣は、「価値形態」における受身的役割を逆転し、交換主語として、現実的な価格を商品に付与する。しかも、かかる商品世界特有の測定は、貨幣商品そのものの「測量」をも、改めて準備せざるをえないのである。かくして、この「価格尺度」機能は、「価値」からの「価格」の「質・量」的背離の「可能性」を一歩、強化することになる。

第二の「流通手段」は、貨幣主導の「価格明示」商品を現実に貨幣が「イニシアティブ」をとりつつ交換取引する機能である。よって、G－Wの過程は、一足飛びの跳躍となり、W－Gの行程は、逆に「命がけの飛躍」となる。ここに、貨幣所有者に、「すぐには買わなくてよい」余裕を残し、「恐慌の可能性」を胎生せしめる。また、この機能の商品獲得のための「手段」性は、実在的なその定在の「一時性」しか約束せず、さらに、その機能効果促進のための「鋳貨」法は、実在的定在としては半端な「代理物」としての「(国家) 紙幣」をも派生させる。

最後の「貨幣」機能は、さらに「蓄蔵貨幣」、「支払手段」および「世界貨幣」に分割される。まず、「蓄蔵貨幣」は、個々の商品所有者の「シシュフォス的労働」の行なう、「多き売、少き買」の差額にもとづく一部「商品流通」の「中断」による貨幣の「目的」化であるが、社会的には、「全流通必要貨幣額」の減少にもとずく「流通貨幣」の引上げであり、その額の増加に至るや、「負」の「蓄蔵」となる。その実在的定在は、「商品流通」の「外」に「代理物」も含み「不動化」される。これにたいし、「支払手段」は、「商品流通」の順序の「さしかえ」にもとづく、貨幣の「目的」化であり、「信用」の理論的根拠をなすが、「流通必要貨幣必要額」所与のまま、「商品流通」「内」において、「代理物」を含みながらも「休止的」な「絶対的商品」として「定在」化する。そして、この「貨幣引渡しの先送り」は、先の「すぐに買わなくてもよい」恐慌の可能性をさらに増幅する。最後の「世界貨幣」は、「国内流通」とは別箇の「国際流通」における貨幣の商品世界からの自立化である。したがって、「価値概念」とその「定在様式」との一致は、一応の頂点に達するのであり、「目的」も「一般的支払手段」を基本的機能に昇格せしめ、その「定在」も代理を許さぬ「固定化」された「地金形態」をとるに至らしめるである。

論文審査結果の要旨

I

本論文は、マルクスの経済学体系の端緒・始元部分をなす「商品・貨幣」論について、マルクスに内在しつつ、それが、かれの異なる時期の諸著作において固有の意義と限界を有しながら、形式面でも、内実面でも、漸次彫琢改善を重ね、最終段階で定着に向かう方向性を見据えようとする試みである。言うまでもなく、当該分野には既に膨大な量の研究の蓄積があり、それらを整理したうえで新たな論点を提示すること自体、一つの困難な課題たりうるが、著者は、過去の論争点を十分に考慮しつつも、本源に立ち返った、徹底したテクスト・クリティークを通して、そこから自ずと析出される「商品・貨幣」論の論理構造を浮き彫りにしようとしている。本論文は、著者がこれまで世に問うた二冊の著書、『「経済学批判」と「資本論」』(1974) および『「資本論」と価値論』(1982) とを合成して纏め上げたものであり、それが取り扱っている対象領域は、マルクスが『経済学批判』として著わした内容、したがって『資本論』第一部第1編にほぼ照応している。以下、本論文の構成にそって、その論旨を概観しておく。

II

第1編「序論」では、マルクスの「商品・貨幣」論の扱いが、「ノートM」から現行『資本論』に至るまでの間に、どのような変遷を辿ったかが、いわゆるプラン問題にも言及しつつ、詳細に跡づけられている。このさい、著者は、経済学における「一般的・抽象的諸規定」の内容が、この間に次第に整序され、超歴史的な面と歴史的な面との関連についても、これを序列的・継起的に叙述

しようとする当初の構想が変更され、後にはむしろ同一物の二相として並列的に把握されるようになる、としている。その結果、たとえば①「生産一般」→②「交換価値」なる始元論が廃棄され、①は「絶対的剰余価値」論の中の「労働過程」論として、②は「商品」論として、それぞれその所を得るに至るものとされ、その経緯が資料的に追跡されている。

第2編「商品論」は、貨幣生成の論理的筋道の解明に照準を合わせた三つの章から構成されている。第1章「価値の実体と労働価値説」では、スミスの価値論と対比しつつ、マルクスの労働価値説が、使用価値、価値実体、価値形態、等の諸カテゴリーの有機的、重層的関連のうちに構築されており、このうち、価値実体は、従来の研究では、これを歴史的特殊性において理解する立場と超歴史的一般性において理解するそれとに二分する傾向が強かったが、著者によれば、それは超歴史的内実と歴史的内実との統一概念として据えられるべきものである。すなわち、a)「人間の脳や筋肉や神経や手などの生産的支出」、「人間労働の一般的支出」と、b)商品生産に固有な「単なる同種の労働の凝固」、「対象化された労働」、「社会的労働の物象化」等との概念的峻別が必要であり、b)が感覚的な対象、価値形態へ転成する論理的プロセスこそは、「価値形態」論の真髄である、としている。

第2章「貨幣の生成論としての価値形態と交換過程」は、周知の一大争点、「価値形態」論と「交換過程」論とはいかなる関連にたつか、という難題に著者なりの解答を与えた、いわば本論文のさわりの部分の一つといえよう。著者によれば、貨幣の生成を解明するという課題には、価値実体が等価物商品の身体へいかに転倒的に反射するか、という問題と、その到達点に成立する「一般的等価物」がいかにしてある特定の一商品に固定・骨化するか、という問題とに分けられる。マルクスにあっても『経済学批判』段階では、かかる整理が不十分であって、両者が一緒くたに論じられている。しかし、『資本論』では、使用価値の捨象という視点導入と呼応して、前者の課題を「価値形態」論の検討対象として限定し、「等価物」主体の交換表示や「相対的価値形態」にたつ商品所有者の欲望表現を考察外におくことによって、商品世界における任意の商品の組合せを総ぞろいさせることができ、したがって「一般的等価物」の導出が可能となる。しかし、これだけでは、まだ、貨幣の生成の理論的領分の前段をなすに過ぎない。というのは、「価値形態」論は、商品の「分析的、潜在的、一面的視角」からの考察だからである。これにたいし、使用価値と価値との直接的統一としての商品が現実的関係において陥る矛盾、そしてそれが自らを展開する関係こそは、任意の商品が占めうるとされた「一般的等価物」の位置に、金という特定の商品が排他的に固定・骨化されざるを得ない所以を説くことに他ならないのであって、これが「交換過程」論の主題なのである。貨幣の理論的生成は、この両者が相挨って初めて完了する関連にある、という見地を提示している。

第3章「商品論の総括としての物神性」は、その表題が語っているように、『資本論』第一部冒頭章第4節「商品の物神的性格とその秘密」の同章における位置づけを論定しようとしたものである。この課題の検討の過程で、著者は、『経済学・哲学草稿』で展開されている四つの疎外のうち、第一のそれ、すなわち「労働の生産物が、ひとつの疎遠な存在として、生産者から独立した力とし

て、労働者に対立する」、あるいは労働の「対象化が対象の喪失および対象への隷属として…現われる」という事態に着目し、ここに物神性の発露を見出すのである。無論、ここで言われている疎外は、資本関係の現存を前提しているが、『経済学批判要綱』を展開軸として、それ以降の著作では、自由で平等な商品交換に即した、対象化された労働の神的性格の解明としての問題を立て直すに至るのである。そこでは、超感覚的な、幻の価値対象性（価値実体）が具体的、感覚的な価値形態として顕現し、同時に人間関係が物的関係に転成していることのうちに、fetischな性格が認められるのであって、したがって上記第4節が価値実態論と価値形態論との展開を踏まえた総括論である、と結論している。

第3偏の「貨幣論」は、第1章「価値尺度の理論的準備性」、第2章「流通手段の媒介的内容」、第3章「貨幣の現実性」から成るが、これがマルクスの所謂貨幣の三大機能に準じた配列であることは一目瞭然であろう。だが、これらの表題のうちには同時に著者の独自な問題意識が表出している。すなわち、通例、ⅰ）「価値尺度」、ⅱ）「流通手段」、ⅲ）「（貨幣としての）貨幣［a．貨幣蓄蔵、b．支払手段、c．世界貨幣］」としていわば周知の序列づけをもつ貨幣の諸機能は、相互にいかなる内的関連にあるのか、という素朴にして根本的な疑問である。これに対する著者の解答は、大略以下のように整理できる。

第2編で見たような論理によって生成した貨幣は、いまや、自らを主格とした運動を展開する。すなわち、貨幣商品は、使用価値としての諸商品との対立関係のうちに、順次価値存在を獲得し――「観念的」な形態から「実在的」な形態へ、商品流通の「内」から「外」へ、「手段」から「目的」へ、「一時的」形態から「固定的」形態へ、「代理者を含む」定在から「地金形態」専一のそれへ等、――終にはその概念に一致する定在様式に達するのである。そしてかかる運動の軌跡がとりもなおさず「貨幣の諸機能」として列挙されるところのものに他ならない。

ところで、本論文の貨幣論に特徴的なのは、「価値形態」論→「交換過程」論→「貨幣」論なる上向法に、弁証法における「トリアーデ」形式の運用を見出し、当面する貨幣諸機能内部の相互的連関も、全く同様の展開方法によって貫かれている。換言すれば、商品の貨幣は同一の基準によって統一的に把握されている、とする観点である。「価格尺度」は、「価値形態」の場合と「同一対象分野」にたいして、主体が商品から貨幣へ交替した考察であって、現実的な価値量の測定＝価格付与機能は、流通・交換の「理論的準備過程」である。貨幣は「自らの価値性格を単に自称し宣言する段階」にあるといえる。これにたいし「流通手段」機能は、「交換過程」の場合のように、観念的な価値であるとともに現実的な使用価値によって制約されている商品が、交換のイニシャティブをもちえず、貨幣主導の交換取引に応ずるところに発する。しかし、この機能は、商品獲得のための手段としての性格が強く、貨幣は「一時的な現実的存在しか主張しえない」。最後に「（貨幣としての）貨幣」は、使用価値による制約から解放され、「価値としての現実性を獲得するところにその面目がある」。しかし、それはその内部に再び「トリアーデ」を内包している。商品流通の中断の結果として生ずる「貨幣蓄蔵」は、流通への「現実的出動の理論的予備」段階にあるのであり、

「支払手段」は、商品流通の順序の「さしかえ」によって貨幣の目的化を果たすが、商品流通の限界を脱却できない。ひとり「世界貨幣」のみが使用価値の対極に価値の自立化を十全な形で展開できる、としている。

第4編「補論」は、第1章「価値形態の秘密」、第2章「価値形態の発展」、第3章「交換過程」、第4章「物神性」から成り、このうち前3者には、本論文「第2編第2章の補完」、最後の1章には、同「第3章の補完」という副題が付してある。これらは、主として、価値形態論の理解にかかわるマルクスの論述について、『資本論』の初版本文、同付録、第2版、第4版以降の諸版における、形式上、内容上にわたる改変、異同を細大もらさず詳細に調査検討し、必要と思われる解釈や論評を加えたものであり、本論文第1～第3編で論定を試みた著者の見解を資料の面から傍証する役割を担っている、ということである。

Ⅲ

以上に見たように、本論文が解明しようとした点は、次の二点である。第一に、商品から貨幣への理論的生成はいかになさるべきか、第二に、かく生成した貨幣の諸機能は何であり、それらは相互にいかなる内的関連にあるか、がそれである。

第一点についていえば、これは、わが国では、いわゆる価値形態論争として長い歴史をもつ論点であり、価値形態論を扱った内外の論文は、恐らく数百編を下らないであろう。それだけに新味のある議論は出にくい状況にあるが、著者は精緻を極めたテクスト・クリティークを通して、以下の点で独自の議論を展開している。（1）価値実態なるカテゴリーは、超歴史的側面と歴史的側面との統一であり、このうち後者が価値形態として現象するものであること、さらに価値実体と価値形態の統一が「商品物神」論を形成すること。（2）「交換過程」論は、貨幣生成論の後段をなすが、その含意は、「価値形態」（形態Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ）では本来説きえない「一般的等価物」の骨化（形態Ⅲ→Ⅳ）がそれの固有の考察対象であること、等である。

第二の点については、第一点とは逆に、実際には基本的な課題であるにも拘らず、従来、これを正面から取り上げた議論は殆どなかったといえる。マルクスが、貨幣の諸機能を、前述のように、ⅰ）ⅱ）ⅲ）［a．b．c］という一見奇異な形に整理したことについては、誰しも、それが「弁証法」と関わっている、という一般的な予感はもつにしても、これを敢えて設問として対自化し、それに明示的な解答を用意した著者の先駆性は、高く評価できる。すなわち、貨幣の機能が「一定の理論的順序に従った内容」であり、「関係的階層」をなすと著者が言う場合、それらは、ⅰ）使用価値の捨象、ⅱ）使用価値の現実的制約、ⅲ）使用価値の制約からの解放、に照応した「価値存在の在り方の差異」を基準として配列されており、これを貨幣の運動として見ると、ⅰ）流通への理論的準備段階、ⅱ）現実的流通段階、ⅲ）流通からの離脱段階、といった形を採り、それは同時に、ⅰ）「価値形態」、ⅱ）「交換過程」、ⅲ）「貨幣」、という論理的階層とアナロジカルに対応している、との謂であって、このような解釈は、今後の議論において十分積極的な検討材料たりうるで

あろう。

ところで、本論文は、上に見たような独自性を含みながらも、全体としては、マルクスの思考の軌跡をいわば追体験的な忠実さで辿り、その先に、在るべき「商品・貨幣」理論を探る、という比較的地味な展開に終始している。これは、価値論という当該領域の特殊性にもよるが、基本的には、筆者の学風を示すものであり、この点の評価は、無論、人によって相違しうるであろう。しかし少なくとも、本論文が、その対象とする範囲に関するかぎり、マルクスの諸著作および諸版本間の異同を、網羅的に、逐語的ともいえる丹念さで調べ上げたことは、現在刊行が進められているMEGAに期待しうる資料の一部を、これに先駆けて提供するものであって、こうした地道な研究は、それ自体として評価されるべきものであろう。

以上により、本論文は経済学博士論文として合格、と判定する。